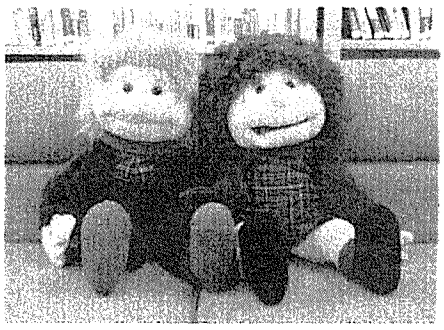
ジェンダーフリースペース通信 6号
GENDER FREE PRESS

〒195-8585
東京都町田市金井町2160
和光大学G112(G棟1階)
044-989-7777 内線4112
www.wako.ac.jp/gender/

デートレイプを考える 開催

グループBONAでは、「デートレイプ」という言葉を知ってもらうためのワークショップ（以下、WS）を提供しているが、去る6月1日、ジェンダー・フリー・スペースの主催で開くことができた。以下は、その報告である。（話者・報告者 池橋みどり）



ロールプレイで使用された人形

WSは、3時間の参加型で3つの部分から成る。はじめに、いくつかの文を聞いて自分の感じ方を「そう思う。そうは思わない」で表現する。「自分と意見が異なる人の考えが聞けてよかった」（女性）、「楽しかった。意見が分かれたり、全員同じ場所に行ったり。自分の考え・ポジションを知ることができた」（男性）との感想が聞かれた。

次に、WSのメインの部分になるが、大学生のカップルに起きた出来事について、2つに分かれてグループワークをした。この中で、「現実でも似たようなことがたくさん起きているんだろうなと思った」（男性）、「例を出すことで、具体的になり、身近に感じることができる」（男性）などの声があった。デートレイプの起こる社会的背景について考えてみると、普段何気なく接している情報や考え方が根本にあることに気づき、いつ誰が経験してもおかしくないくらい身近なことだという認識を持つ。

最後に、ロールプレイをした。もし自分が、あるいは、友だちがデートレイプに遭ったら、私たちは何ができるだろうか？できることがなかったとしても、せめて味方でいたい。二次加害をしないでいたい。そうは思っていても具体的にはどうすればよいのかわからない。また、WSに出ていれば、「デートレイプ」とは何かわかった気になるが、いざ人に説明しようとするとうまくできない。それらに対処するために、ここで、実際にありうる会話を演じてみる。「つきあっていたのに、レイプになるの？」「彼女が誘っているように見えたよ？」などの言い分に、説得力のある返事をすることはなかなか難しい。参加者は、「時間をもっととってほしかったが、みんなほとんどアドリブなのにすごくよくできていてよかったと思う」（女性）、「ぶっつけ本番でしたが、女性の気持ちを少しだけ見れた気がします」（男性）という感想を持ったようだ。参加者はみな上手に演じていたが、とりわけ、ご本人を前にしての、男性参加者の演じた船橋先生役には感服した。

『どうしようかな、私のキャリア』

坂爪　洋美

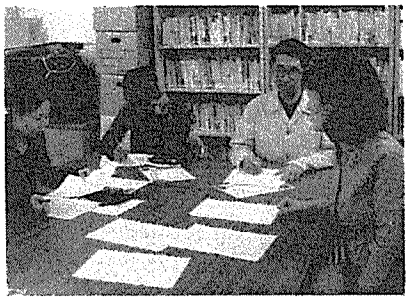
7月13日に開催するワークショップの報告を7月6日までに書いてほしいという依頼が来た。実施以前に報告を書くというのもおかしな話だが、もともと6日に開催する予定だったものを、無理を言って変更してもらったのだから自業自得だ。

ジェンダーフリースペースに関わるようになってしばらく経つが、「ジェンダー」には苦手意識がある。私が大学生の頃、とあるジェンダー論の先生の講演を聞く機会があった。その人が非常に強烈な方だったこと以外、何も覚えていない。それ以来「ジェンダーに興味がある人＝熱くて怖い＝下手なことを言うと怒られるに違いない＝苦手」という図式を修正する機会に恵まれなかった（機会に恵まれなかったのは、単に私が硬直した認知の持ち主だからである）。そんな私が「ジェンダーフリースペースに関連して何かやれ」と言われ戸惑った。私にはジェンダーについて語る知識は欠落しているし、基本的に苦手だ。どうしたものか…と迷う中でできたのが「働く」というテーマである。ジェンダーに無理に関連づけるのはやめた。無理すると疲れるので、自分がやりたいテーマをやるのが一番という結論に達したというわけだ。

ワークショップの趣旨は「大学卒業後、どんな風に働きたいか、みんなで話してみようよ」ということである。無理に関連づける必要はないと思いながら、少しだけジェンダーに配慮して、対象者を女性に限定するような案内文を作成してしまったことを今ちょっとだけ後悔している。

フロイトの言葉に、「ｌｏｖｅ　ａｎｄ　ｗｏｒｋ」という言葉がある。誰かを好きになるように、働くことは健康な人にとって自然な行為である、という意味である。それにも関わらず、昨今、それが妙に難しい行為のように捉えられる機会が増えてきている。「働く」ということを気楽に語る場が作ってみたい、というのがこのワークショップの１つの意図である。

一方で、「働くこと」には軌道修正がつきまとう。軌道修正をする際の羅針盤となるのが、私たちが内面に抱える「私はこう働きたいの」という意思である。それについて考え、かつ他の人と共有する場面を作ってみたい、というのがワークショップのもう１つの意図である。この試み、実際にはどうなるだろうか。「ジェンダーと関係ないじゃない！！」とか「もっと熱い意思を持って語れ！！」などと、ジェンダー関係者から叱責を受けるのではないかと、硬直した認知の持ち主かつ小心者の私は内心びくびくしている。結果について興味がある方は、ご一報を。



記入したワークシートを基に
自分のライフプランを考える

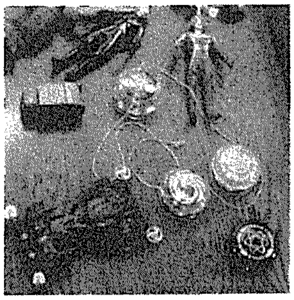
モノに見る女／男

―〈おもちゃ〉が語るジェンダーの歴史―

2005. 05. 16～05. 20　於 図書館梅根記念室

人形は紙・土・木・布・蝋などで人の形を模して作ったもので、古くは「ひとかた」といった。日本では縄文時代の土偶、弥生から古墳時代の埴輪、中世以降は観賞用や玩具として発達。

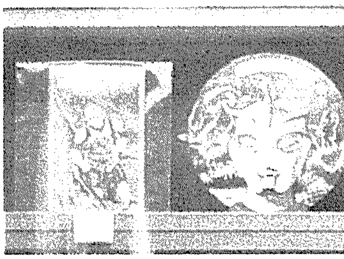
今回は各国の「抱っこ」「おんぶ」「親子」や働く人形を展示。子育ては女性の仕事といった性別分業を物語っている。



「おもちゃ」売り場に行くと、シールをはじめ、ファンシー・グッズに至るまで、あらゆるものが「女の子」「男の子」用、すなわち性別（ジェンダー）に分類されている。

メンコは人の顔型をかたどったものが面子と呼ばれるようになった。その歴史は、驚くことに平安時代から始まっていた。

今回は明治以降のモノを展示。絵柄は戦争時の日本軍、戦後は米兵や西部劇、平和な時代には、漫画やアニメのヒーローと移っていった。時代の変化と共に男らしさも変化していくのが表われていた。



学生が実際に遊んでいた男児玩具（ウルトラマン・怪獣・ミニ四駆・スーパーヨーヨー）や女児玩具（着せ替え人形・シルバニアファミリー他）が並んだ。

ΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣΣ

ジェンダーフリー初夏のシネマ2005　開催

今回は恋愛によらない〈愛〉をテーマに、それぞれ男女、家族、男同士、女同士の〈愛〉を集めてみました。

【 上映作品 】

『スパニッシュ・アパートメント』2001／フランス・スペイン
主人公は25歳の青春映画。学生がシェアするアパートでの共同生活は、留学や就職など進路を考える学生の皆さんにとっては共感する部分も多いのでは？

『エイプリルの七面鳥』2003／アメリカ
「後悔先に立たず」「親孝行したい時には親はなし」といった状況の起死回生を図る、ポジティブさが光るアメリカらしい（？）ストーリー。

『キッチン・ストーリー』2003／ノルウエー・スウェーデン
最初のシーン以外登場人物は全て男性、だけどしみじみほのぼのしたお話です。シネコン系の映画しか見ない人にはテンポや笑いが違うので戸惑うかも・・・（それが逆に新鮮だけど）。

『下妻物語』2004／日本
嶽本野ばらの小説が原作。ファッションも見ものだが、意外（！）にも笑えます。

後期は同性愛をテーマに計画中です。（見たい映画、お薦めの映画を募集中しています）学内掲示をしますので、ぜひ参加してください。

＊映画や書籍について、学生有志によるジェンダー視点の通信号外を発行予定（一〇月末）です。秋の夜長に、読書や映画鑑賞の参考にしてください。

海外情報

韓国での第9回国際女性学会議前夜祭

井上　輝子

6月19-24日に、ソウルで開かれた、第9回女性学国際学際会議（Women's World 2005）に参加した。世界各地で開催されてきたが、アジアでの開催は今回が初めて。90カ国から約3000人が集まり、日本からも約二百人が参加する大規模な国際会議だった。

19日に前夜祭が、7時とはいっても、まだ日が完全には沈まず、夕日の明かりの中で開会された。まずはソウル市長の次のような挨拶から始まった。ジェンダーの平等・正義は、女性だけの問題ではなく、男性にとっても共通の課題であること。ソウル市は、その実現のために積極的に取り組むこと。女性学は、そのために大きく貢献するであろうこと。

食事が一段落し、完全に当たりが暗くなってから、ライトに照らされた特設会場でパフォーマンスが始まった。「彼女がやってくる」と題した4部構成のパフォーマンスで、これがまた素晴らしかった。身体に障害のある女性たちが、健常者と一緒に各自の個性を生かして演技していた姿が、とても印象的だった。第1部は、女性たちが障害や偏見や限界を超えて、1人1人が「やってくる」ことが暗示される。次に月（女性を象徴）の光の下で、女性たちの小さく、ゆっくりした動きが始まり、次第に速く大きな動きになって行く「月光の下の航海」。そして、月の航海はますます陽気になっていく。最後に、韓国の伝統芸能パンソリの歌手であるアン・スーク・スンが船の船長として登場し、女性学国際会議の開会を祝う歌を朗詠した。何人もの参加者が舞台に上り、一緒に踊り出すなど、感動と興奮の渦の中で、会は終わった。

男女平等への市長の積極的な姿勢と、障害者を含む女性たちの自己表現とは、バックラッシュの荒波にさらされている日本とは対照的な、韓国の元気を象徴するように思えた。

会場にてボランティアスタッフと

本棚から

『性とスーツ』

アン・ホランダー著／中野香織訳
白水社　1997年

今現在、私たちの世界に普遍的に存在する男女の既製服の棲み分けだが、この本を読む事で、服飾に関する概念は大きく変わるだろう。女性が身に着けることが多いブローチやカチューシャ、レースで装飾されたブラウス等も本来は中世貴族男子の正装に用いられていたとは想像しがたいと思う。ファッションのボーダーレス化が急激に進んだのは近代だが、女性がズボン（パンタロン）を穿くことも女性の社会進出に大きく寄与したと言えるでしょう。服の成り立ちをジェンダーから紐解いてみたい人にはオススメの一冊だ。

（人間関係学科一年・小野哲郎）

＊ジェンダーフリースペースでも扱っています。

後期のイベント

・講座『キャリアプランニングセミナー』
【九月二八日　午後四時二〇分～】H206にて
就活やキャリアプランニングについて考えます。

・パフォーマンス『恋愛とセクハラのはざまで』
【一〇月二六日　午後四時三〇分～】
「フォーラムシアターエンパワメント」（竹森茂子さん他）を迎えて

・学生企画を募集中
興味ある・やってみたい企画の持込を待っています。

＊この他にもメディア＆トークや講演会など計画中です。是非ご参加ください。

和光大学